

坪田讓治 作品の舞台

——天満・伊丹家——

山根 知子

はじめに

伊丹家は、坪田讓治の姉政野の嫁ぎ先であり、天満(現岡山市北区御津紙工)にある医者の家系である。政野の結婚相手である伊丹東慶は、天満伊丹家において第四代目となる医者であった。

この伊丹家が、坪田讓治研究において重要である点は、まず作家論の要素において、讓治が作家として世に認められる前の昭和四年から昭和八年までの間、東京に住む妻子を養う必要のために岡山の実家が営む島田製織所の社員として勤めていた時代にあつて、作家として大成できないことからの苦慮と会社経営の困難さのなかで、伊丹家の人々や天満の自然に触れることが心の救いとなつていたという点である。また、作品論の視点においても、伊丹家の人々や天満の土地がモデルとなる作品には、讓治の心救われた思いと深く絡んだ作品のテーマが指摘できる点である。

これまで、讓治作品の舞台として重要な場所である島田(『坪田讓治作品の舞台―島田―』『ノートルダム清心女子大学紀要』第二十七卷第一号 平成十五年三月)、讓治生家(『坪田讓治 作品の舞台―讓治生家―』『清心語文』第12号 平成二十二年九月)、坪

田本家(『坪田讓治 作品の舞台―坪田本家―』『ノートルダム清心女子大学紀要』第三十五卷第一号 平成二十三年三月)、東京・西池袋の自宅(『坪田讓治 作品の舞台―東京・西池袋の自宅と『びわの実文庫』―』『ノートルダム清心女子大学紀要』第三十六卷第一号 平成二十四年三月)について調査結果を順次公表してきた。

これらに続いて今回の伊丹家調査に関しては、これまで十数年間、調査を徐々に進めるなかで、当初は土堀に囲まれた敷地には離れと蔵が存在した。しかし、伊丹家墓所は平成二十年に移設され、伊丹家の敷地は平成二十九年に更地となつて手放され、現在では天満の地に伊丹家の痕跡がなくなつたことから、その実態を留めるべくこれまでの調査の全貌をまとめた。

これまで伊丹家について記録されているものには、坪田讓治の三男である故坪田理基男氏が、父讓治の老衰のため本人の証言を得られなくなつたあとに、文献と親戚への取材によつて得た情報と思ひ出をまとめた「伊丹家の人びと」(『坪田讓治作品の背景』昭和五十九年四月 理論社)がある(本稿における坪田理基男氏の引用はすべてこの著書による)。また、加藤章三氏と筆者とで「解説」を担当した文学散歩(平成二十年十一月十六日)の際の資料と記録

を掲載した「坪田譲治 文学散歩Ⅱ―金川・「天満の里」を歩く―」
〔『坪田譲治文学研究 会報 善太三平』第16号 平成二十一年七月〕
がある。

よって、本稿ではさらに伊丹家についての全貌を本格的な研究として
網羅するため、これらのすでに判明している点に新資料や現場での
取材による新情報を加えて系統的に整理し、譲治にとつての伊丹家
の意義を考察することで伊丹家や天満が背景となつて描かれた譲治
文学の作品理解を深める要素を指摘することをねらいとしたい。そ
の際、本稿での新資料・新情報として具体的には、伊丹家の直系に
あたる伊丹仁朗氏から提供いただいた由緒書「伊丹氏族」や証言を
はじめ、天満の地元で長年伊丹家を管理してきた本郷寛武氏からの
情報が加えられた。そうした情報からの成果となつた末尾の「伊丹
家図」は、建築を専門とする宮嶋泰明氏が平成三十年六月に作成し
たものである。具体的には、在りし日の伊丹家を調査し図面で再現
するにあつて、昭和四年から八年まで岡山に滞在した際の譲治の
伊丹家の印象を重視しつつ、かつ確認をとることができる確実な年
代として昭和十年頃を設定して調査を行った。そこで、伊丹東慶の
孫である伊丹仁朗氏には平成三十年三月二十九日に宮嶋泰明氏とと
もに取材をし、伊丹仁朗氏の監修の協力を得て、宮嶋氏の作成によ
る「伊丹家図」を完成することができた。

なお、本稿全体において、末尾に挙げた「天満古地図」〔五万分
の一地形図（岡山北部）〕明治三十年測図大正十四年第二回修正測
図 大日本帝国陸地測量部 昭和四年四月三十日発行〕と「天満伊
丹家と坪田家 家系図」（筆者作成）、および写真七点を随時参照さ
れたい。

作品に登場する伊丹家の人々と天満の舞台

「バケツの中の鯨」（原題「鯨」昭和六年初出）

まず、譲治の文学作品において、伊丹家の人がモデルとして登場
するのは、童話では「バケツの中の鯨」〔『赤い鳥』昭和六年五月号
に題名「鯨」として掲載された後、「バケツの中の鯨」と改題して
童話集『魔法』（昭和十年七月 健文社）に収録。『坪田譲治全集』
第七巻（昭和五十二年八月）に所収〕である。

この作品の主人公は、六歳の「伊丹良介」である。父親の名は「伊
丹春慶」であり、作品冒頭で良介は、父親が医者であると言い、「ほ
くも大きくなつたら、お医者さんになるんだ」といばつて話す。家
族には他に母親と「春子」という姉がおり、そこに「叔父さん」が
やつてくるという設定である。

これらの人物のモデルについて、まずはまさに「伊丹」という姓
が用いられ、かつ父親が医者であるという設定から、まずはこの父
親のモデルは、譲治の姉政野が嫁いだ伊丹東慶であるとわかる。ま
た、主人公良介とその姉は、東慶と政野の三男四女の子どものなか
の二人をイメージしているといえる。さらに、この「鯨」がちよう
ど初出年の昭和六年頃に書かれたのであれば、伊丹家には、譲治が
接していた頃に、作中の良介の六歳という年齢に最も近い実在の存
在としては、末の息子である敬太がいた。この敬太は大正十三年頃
の生まれであることから、良介のモデルは敬太である可能性が高か
ろう。しかも、譲治の三男である理基男氏は著書『坪田譲治作品の
背景』において、敬太について「私より一つ年下だ」という敬太とい

「う末の息子」（一六七頁）と記していることから、東京に妻子を残して岡山に単身赴任をしていた譲治にとって、敬太は、譲治の幼い三男への思いを重ねながら愛情を注いでいた対象であったと考えられる。一方、姉の春子のモデルは、後述する「風の中の子供」に登場する美代子のモデルが伊丹家の娘不二子であるということが定説となっておりことから、この春子のモデルも不二子である可能性が考えられよう。さらに、作中で伊丹家に遊びに来る叔父さんについては、「町から叔父さんがやって来」たと描写されていることから、そのモデルは譲治自身であるといえる。

さらに環境面から、この「バケツの中の鯨」の舞台が天満の伊丹家である要素を指摘すると、「あすこの山」という山々が近い描写や、また「あすこの橋の下」に「ハヤ」が釣れる川があるという描写があることから、実際に山々に囲まれた天満という地域には宇甘川に天満橋がかかっているという環境と合致していることから明らかである。さらに、少年が「松の木に上」という場面は、伊丹家を舞台とする作品に共通して描かれていることから、譲治が伊丹家の思い出から喚起する象徴的な場面として捉えていたことが認められよう。

「お化けの世界」（昭和十年初出）

それまで譲治が大学時代から作家を目指し始めて二十年ほどの間、なかなか作家として芽が出なかつたなかで、「お化けの世界」は、山本有三の導きで『改造』（初出 昭和十年三月号）に掲載され、四十五歳になった年に文壇からようやく注目されはじめ作家として認められるようになった小説である（『坪田譲治全集』第一巻（昭

和五十三年一月 新潮社）所収）。

登場人物である善太と三平の父親の造形には、実際に譲治が岡山の実家の経営する会社に勤めていた経験が反映している。実際に譲治はこの島田製織所の代表取締役を務めていた昭和初期において、天満の伊丹家をしばしば訪れていた（写真）参照。この作品において父親が困ったときに借金を依頼している「宇甘」と呼ばれる人物は、譲治が実際にこの会社の社長の地位にいた姉の夫伊丹東慶を頼っていた事実から、伊丹東慶がモデルであることは明らかである。

「風の中の子供」（昭和十一年初出）

「風の中の子供」は、「お化けの世界」が文壇において好評を博したあとの新聞連載小説として、昭和十一年九月五日から同年十一月六日まで全三十八回連載された。この新聞という媒体によって、坪田文学は、より世間一般に知られるようになった。その後、単行本として『風の中の子供』（昭和十一年十二月 竹村書房）が刊行されたのち、『風の中の子供（昭和名作選集）』（昭和十四年五月 新潮社）など数種の出版社から同題名の単行本として出版された。そのうえ、この作品は翌昭和十二年には松竹映画（清水宏監督）により上映されることで一層人気を増した。さらに昭和三十二年には文部省選定で作成されたスライドフィルムとそれに対応した朗読台本が存在したことも判明したことから、戦後も評価され続けたことがわかる（日本工藝株式会社 イラスト中山正美）。これらの現物は、平成三十年二月に「文学と岡山」製作委員会によって発掘・復元さ

れ、同年七月の本学附属図書館「坪田譲治コレクション」での展示および本学学生「ツボジョーワールド探検隊」の作成した坪田譲治紹介冊子や活動のなかで公表している（山根知子研究室蔵）。

のちにこの時代を振り返って、譲治は、「お化けの世界」と「風の中の子供」の好評で、永いあいだ暗雲に閉ざされていた私の文学の道の前途に一条の光明がかがやきはじめ、苦闘の時代もようやく報いられて来た」（「あとがき」『坪田譲治全集』第三卷 昭和五十二年九月 新潮社）と記している。

作中の人物としては、「お化けの世界」と同様に、善太と三平の父親として会社勤務の青山一郎が登場する。父青山一郎が私文書偽造の容疑で警察にて取り調べを受けている間、三平は一人で、伯父である「鵜飼のおじさん」に預けられる。その「鵜飼のおじさん」のモデルもまた伊丹東慶である。この伯父は、「八の字髭をはやしている」（〈写真2〉参照）という風貌や「山奥でお医者さんをしている」ことなど、伊丹東慶との符合性は明らかである。

さらに、「風の中の子供」における「鵜飼のおじさん」の医者としての家の構えをはじめ、周辺環境については、伊丹家のある天満の風土と一致することが、三平が初めて鵜飼家を訪れる次の描写から確認することができよう。

バスに乗って五里。バスから下りて、瀬の音の高い橋を渡った。川はかなりの幅で流れている。そこから道は谷間に向ってはいって行く。二町も歩くと、山を後ろに鵜飼のおじさんの家がある。大きな茅葺の母屋、両脇に離れと診察所の瓦屋根、離れの後は白壁の土蔵、土蔵の戸口に太い高い松の木、（後略）

（『坪田譲治全集』第三卷 昭和五十二年九月 新潮社 三〇頁）

ここで、三平と「鵜飼のおじさん」が渡った橋は「天満橋」であり、その川とは「宇甘川」である。この伯父の家の描写は、本稿末尾の〈写真6〉と「伊丹家図」によって確認できるように、小説の表現と一致することが確認できた。

そのうえ、三平が鵜飼のおじさんの家の周辺で奔放な行動をとっていることが描かれるなか、家の付近では、三平がいなくなるという騒ぎのすえ、三平が「土蔵の側の三間もある高い松」に登って枝に腰掛けているのが見つかるという松の木の存在についても「伊丹家図」において認められる。

さらに、先の描写にあった宇甘川と見られる川では、三平が盥の船に乗って流される騒ぎのなかで、次のような描写がなされる。

この河原を五町も下れば、そこは本流の大河で、高瀬舟などが通っていた。その間に淵もあれば、滝のようなどころもあった。淵には渦も巻いていた。（『同』三六頁）

この「本流の大河」は旭川であり、宇甘川が旭川と合流する場では、二つの川に挟まれた地に、譲治がかつて通った「金川中学」がある。その旭川を下れば、川は岡山市内を流れる西川用水を経由して岡山駅付近で能登川（大川とも呼ばれる）に分かれ入り、能登川は譲治の家のある島田（現岡山市北区島田本町）に至ることも作品中で密かにイメージされていることが推し量られる。

この引用に続いて、川で流される三平を探すことになる「鵜飼のおじさん」の登場が「鵜飼のおじさんは山村ばかりなので、往診というのには、馬に乗って出かけていた。丁度、その子供達の騒いでいる時、河の土手を通りかかった」と描かれる。この馬での往診についても、伊丹東慶の実際の往診の姿に重なる。

さらに、作品では三平が伯父の娘である美代子とともに「山の池」に行く情景が次のように描かれている。

そのうち、山の池の側に出たのである。谷間の一方に高い堤があつて三方は山の斜面で、高い木が茂っていた。水にはその木々が映り、蒼々と深く、物凄さに三平もいばることを忘れた。
〔同〕三九頁

この描写に符合する池が、譲治のしばしば釣りに訪れた「入野池（いんのいけ）」であることは、昭和七年に撮影された譲治の「入野池」での釣りの写真（写真3）が存在することから、すでに明らかとなっている。

なお、この入野池は、明治三十四年の早魃に際して村人たちが甚大な被害を受けたことから、明治三十七年に人工的に新設されたものであった。

作品に取り入れられた天満伊丹家への譲治の思い

では、これらの作品が成立した頃の譲治にとって、こうして作品に取り入れられた天満という土地や伊丹家の存在は、どのような意味をもっていただろうか。ここでは、譲治が作家を目指しながら葛藤を重ねた人生の流れのなかで、その意味を把握することが重要となる。

譲治は大正四年六月、早稲田大学卒業後、作家を目指しつつ、翌大正五年には結婚し、長男が生まれ、現東京都豊島区に居を構える。雑誌『黒煙』『地上の子』に関わり、作品を寄稿し始めるなかで、大正八年には、母と兄の要請により実家の家業島田製織所の仕事を

担い、岡山と大阪支店勤務とで大正十二年までの約四年間を過ごす。このときすでに社内の人間関係において軋轢を感じていた譲治は、本来戻るべき文学の世界に心惹かれてならなかった。

大正十二年より一旦会社を離れることができた譲治は、東京の自宅にて創作に専念し、大正十五年には最初の短編集『正太の馬』（春陽堂）を刊行し、昭和二年には児童雑誌『赤い鳥』に童話を掲載し始めるなど作家としての礎を築いていくが、すでに子どもは三人となり妻子を養う生活は苦しくなる。

そのなかで、昭和四年六月には、妻子在京のまま再び岡山に戻り、島田製織所に勤務をするが、翌昭和五年に一族の長であった長男の兄醇一が会社経営の人間関係のもつれの苦しみから自殺によって亡くなったため、昭和六年には次男である譲治が島田製織所専務取締役に就任した。その当時、姉の夫である伊丹東慶は、天満での医者 の傍ら、島田製織所の社長を務めていた。

この昭和六年には、『赤い鳥』が約二年間休刊したのちに復刊したことで、岡山から原稿を送って童話の発表を再び開始している。その復刊後二作目に寄せた童話が「鯨」（のちに改題して「バケツの中の鯨」）であった。すなわち、岡山時代に書かれた「鯨」は、伊丹家との交流のなかで生まれたといえる。

専務取締役になった譲治は、自殺をした兄の苦しみを追体験するような立場に置かれるなか、この頃、自らの心の癒しを求めている。そうしたなかで、休みには自然のなかに憩いたいという思いが、昭和七年の「秋ごろから釣りの味を覚え、しきりに山の池に出かけるようになる」（『坪田譲治年譜』『坪田譲治全集』第十二巻 昭和五十三年五月 新潮社）という行為につながったと思われる。巻末

の写真では、天満におけるスーツ姿の讓治（写真1）は、社長である伊丹東慶との仕事上の関係で天満を訪れた際であると思われる、昭和七年頃とされる（写真3）では、しきりに出かけたという「山の池」の一つとして挙げられる天満の「入野池」での讓治の姿が認められる。

このように昭和六年から七年にかけて、讓治の天満への思いは、仕事面の必要もありながら、私的な釣りも楽しみ、自然のなかで癒される要素を強めていったと思われる。しかも、妻子を東京にしている讓治にとって、伊丹家の家庭との交わりは心が温かく解放される場であったに相違ない。また、岡山から『赤い鳥』への童話原稿を送る作品執筆の際に、自然のなかで伸び伸びとした子ども本来の姿を見出す貴重な場が、伊丹家の子どもたちとの交流であったといえる。そのまなざしが、童話「鯨」の内容にあふれているといえよう。

続いての昭和八年七月には、讓治が株主総会において島田製織所の取締役を策謀により落とされるという事件が起こる。そのため讓治は心痛めながら即日上京し、その後生活のための苦闘のなかで再び貧困にあえぐ作家生活に入るのである。

そうしたなかで、先に触れた昭和十年発表の「お化けの世界」と昭和十一年発表の「風の中の子供」には、いずれも会社での苦悩の日々と株主総会での事件が素材とされている。ただし、そうした大人の世界の現実のなかで、両作品ともに子どももののいのちの伸びやかさと心の救いのありかが表現されているのは、当時の讓治にとって、岡山における島田と天満の二地点にあって、島田での利害の絡む大人の現実的生活に対して、天満伊丹家の子どもたちと自然によるも

う一つの世界が、人間的で豊かな心を支えてくれているという実感をもつ空間として捉えられていたのではなからうか。

以上のような人生との関係を基盤に据えての作品の位置づけを踏まえ、次に伊丹家への讓治の思いをさらに知ることのできる調査結果をまとめてみたい。

姉^{まきの}政野

伊丹家に嫁入りすることになる讓治の姉は、讓治より四歳年上であり、四男一女の兄弟の唯一の女性であった（昭和五十四年十二月十一日没 享年九十三歳）。

讓治の作品では、随筆「女の美しさ」（初出『朝日新聞』昭和三十九年二月九日）に、政野の女学校時代の様子が描かれている。

私が十二三の時とされます。六十年も昔です。姉が岡山の女学校と云うのに行っていました。その姉の卒業の時の記念写真だったかも知れません。その写真を中にして、三四人の姉の友達、額を集めて、議論していました。（『坪田讓治全集』第十二巻 昭和五十三年五月 新潮社 三四四頁）

政野が通ったという女学校は、現在の岡山県立岡山操山高等学校の前身にあたる「岡山高等女学校」であることが、同校の『会員名簿』（創立一〇〇周年記念版 岡山県立岡山操山高等学校同窓会）の「明治37年卒業（本科第2回）」の欄に「伊丹（坪田）政野」と記載されていることから判明した。

その後、讓治の年譜上（『坪田讓治年譜』『坪田讓治全集』第十二巻 昭和五十三年五月 新潮社）では、結婚までの政野の記述に

ついでには、明治三十八年、讓治十五歳、政野十九歳の夏に、「岡山県笠岡沖の片島に姉政野と避暑」（三七五頁）とあることと、明治四十年、讓治十七歳、政野二十一歳のとき、政野が「京都帝大病院に入院、その看病のため京都に赴き一か月ばかり滞在、京都の方々を見物する」（三七五頁）とある。

特に前者の片島での避暑については、隨筆「少年薄暮（片島）」（初出隨筆集『班馬鳴く』昭和十一年十月 主張社）にて、「明治三十八年、今から二十幾年前、私はそこに行つたことがあります。女学校を出た姉と従姉のお供をして、笠岡から小さな舟に乗り、ギツチラギツチラと、船頭のごぐ一丁の艚にゆられ、舟ばたから海の水に手をひたしたり、姉達の謡う歌に声を合わせたり、水上に跳ねる魚に歓声を上げたりしてやつて行つたのです」（『坪田讓治全集』十二卷一〇一頁 昭和五十三年五月 新潮社）と描かれる。

また、後者の京都市行きについては、坪田理基男氏の著書によると、政野はこのとき「神経衰弱をわずらつた」（一六〇頁）とある。また坪田理基男氏は、京都帝大病院にまで入院させたのは、母親の幸が年頃の政野の結婚について心配したためだろうと推測している。

不受不施派の縁による伊丹東慶と讓治の姉政野との結婚

この政野が、伊丹家に嫁する縁は、坪田家および伊丹家の信仰する日蓮宗不受不施派のつながりによるものだった。

その前提として、坪田讓治の父平太郎は讓治の八歳のときに亡くなり、讓治より十一歳年上の長男醇一が坪田家を継いでいたが、明治三十九年にアメリカ留学をした際に、神学校へ在籍してキリスト

教信者になって帰国したという経緯があった。讓治の母幸は、そこで、当時の不受不施派の管長で坪田家に入りのあつた日寿上人に、結婚相手の相談をしていた。

讓治の記述では、「兄弟仲よく」（初出『新潮』昭和三十六年七月号）と題された文章のなかで次のように記されている。

その頃、姉に嫁入り口を持つて来る人が、毎日毎日やつて来ましたが、その度、母はこれらの人を御馳走するつたらありません。中でも一人のお坊さんがありました。それでも後には、日蓮宗の小さい宗派の管長さんになつた人ですから、きつと偉い人だったのでしようが、その人が度々やつて来ました。（『坪田讓治全集』第六卷 昭和五十三年三月 新潮社 一五七―一五八頁）

この文章に続いて、結婚が決まつた際には「式を私の家でやつた」とある。

ちなみに、東慶の住む天満の村は、日蓮宗不受不施派の信者が多い村で、坪田理基男氏の著書によると、不受不施派が明治九年に再興するまで扱ひだつたために、禁教を解かれるまでの伊丹家は「信者の子弟の中から、希望する者や選ばれた者を、不受不施派の僧侶に教育する隠れ家」（一五七頁）だったという。

伊丹家の由緒

このたび伊丹東慶の孫にあたる伊丹仁朗氏より提供していただいた「伊丹氏族」由緒書によると、伊丹家の先祖の最初は次のように書かれている。

伊丹氏族

摂津国河辺郡伊丹荘に起る豪族にして藤原鎌足公九世孫鎮守府將軍藤原利仁公の後裔なり

この文章のあと、「大織冠鎌足／内大臣姓に藤原と賜う」として名が列挙される。藤原鎌足をはじめ十八人の名が連ねられるなかで鎌倉幕府の御家人加藤景廉の名が見られ、その二代あとの十九人目に次のように書かれていることから、伊丹城主となる伊丹姓が称され始めたといえる。

景親 伊丹城によりて伊丹兵庫頭と号し元祖とす

伊丹大和守

伊丹城は別名有岡城ともいい代々居城となす

ここから、この伊丹家の先祖は、現在の兵庫県伊丹市の名に連なる伊丹氏であることがわかる。地名辞典によると「伊丹市」の項目中で「源頼朝側近の御家人加藤景廉の子孫を称する伊丹氏が活躍するようになり」(『角川地名大辞典28 兵庫県』角川書店 三九四頁)、伊丹が発展したとある。

それから七代を経て、豊臣秀吉に仕えていた伊丹家は、関ヶ原以後、「一族の内に備前に落ちのびた一人が赤磐郡大田に居をかまえて十七代伊丹康人となる」と、備前への移住をしたことが示される。こうして、この大田で「代々医を業とした」伊丹氏が、現在の岡山市北区建部町大田から岡山市北区御津紙工にあたる天満の地へと移ることになった経緯は次のように由緒書に記されている。

日蓮宗不受不施派信者で集落をなして居る同じ信仰集落御津郡宇甘天満は無医村のため懇望して分家し医を開業する様むかへた 徳川時代の事である

こうして天満への分家したのは、漢方医伊丹善平(明治二年四月二十三日没)であった。

医者の家系としての天満伊丹家

大田で代々医者をしていた伊丹家から分家した天満伊丹家は、天満で医者の家系として定着をし、医療を続けることになる。

天満に分家をした伊丹善平により、天満は無医村から、医者がいる村となった。その漢方医としての伊丹家を継いだのが、伊丹東庵(養子 明治十五年九月四日没)であった。

東庵は、天満の村人はもちろん、近隣の村や遠い村の人々からも、名医として慕われた。この東庵には、後継ぎがいなかったため、養子として迎えた研吉(明治四十年八月三十一日没 名前の漢字表記は、坪田理基男氏の著書によると「健吉」とされているが、本稿では「伊丹氏族」の由緒書に表記されている「研吉」を用いる)が跡を継いだ。研吉は、それまでの漢方医ではなく、岡山医学専門学校を出ており、西洋医学による医師となった。しかし、坪田理基男氏の著書によると、研吉は「大変な酒好き」(一五八頁)のため、先代の東庵の時代から家の財政を傾けさせてしまったという。

伊丹東庵とちがい

研吉の後継ぎとしては、医者が続けてほしいという村人の懇願もあり、研吉の長男である伊丹東慶(昭和十四年七月七日没 享年五十五歳)が、熊本医学専門学校で学ぶこととなる。

讓治の記述では、「兄弟仲よく」(初出『新潮』昭和三十六年七月号)のなかで次のように記され、坪田家も東慶を金銭的に支えて

いたことがわかる。

姉は田舎の医者之家に嫁入りしました。そのまだ医学生だったあと、とりと結婚したのです。一年か、二年、学校が残っていて、その学費と、開業費を私の家から出しました。(『坪田讓治全集』第六卷 昭和五十三年三月 新潮社 一五八頁)

讓治の作品中で、伊丹東慶をモデルとする人物の名前については、小説「お化けの世界」(初出『改造』昭和十年三月号)では、金銭を「宇甘うかいから借り」、その仲裁のために「宇甘に仲へ立って貰つ」たとする記述が登場する。この「宇甘」とは、地名の宇甘を人名として使用したもので、東慶が岡山県御津郡宇甘西村字天満(現岡山市北区御津紙工)に住んでいたことよって、ことがわかる。

また、その一年後の昭和十一年に発表された小説「最後の總會」(初出『文芸』昭和十一年五月号)では、伊丹東慶にあたる小説の人物に「天満圭介」(『坪田讓治全集』第二卷 昭和五十二年七月 新潮社 二四七頁)という名をあて、同様に東慶の居住する地名の「天満」を姓として使用している。

さらに、その半年後発表された、代表作となる新聞連載小説「風の中の子供」(初出『東京朝日新聞』夕刊 昭和十一年十一月 全三十八回)では、伊丹東慶をモデルとする人物は「鵜飼のおじさん」とされる。これは、先の「バケツの中の鯨」で登場した「宇甘」という人名と同様に、「宇甘」という音と同じ「鵜飼」という表記を使用することで、讓治にとって宇甘の地域を想起させるものとなっているといえる。

以上のように、讓治は、伊丹東慶をモデルとする人物の人名として、「伊丹」を使用しない場合には、伊丹東慶のゆかりの地である「宇

甘」「鵜飼」「天満」などの地名に関連する名を用いていることがわかる。

次に、実際の伊丹東慶に対する当時の人々の評価をはじめ、讓治自身の評価についても記された天満の地における碑文等を確認したい。まずは、現在の「天満公会堂」の正面に「頌徳碑」があり、村人が伊丹東慶を称えていたことが、碑の裏面に次のように記されている。

伊丹東慶先生ハ当地ニ醫師タルコト三十一年在郷軍人分會長タルコトマタ三十年村會議員タルコト十一年ナリキ不言実行五十四年ノ生涯ヲ郷村郷人ノタメニ盡シテ変ルコトナカリキカル人コソマサニ国家ノ中堅ト言フベシ惜ムベシ昭和十四年七月七日没セラソノ徳ヲ懐フモノココニ像ヲ建テ永ク温容ヲ忍バントス

宇甘西村有志

この碑は、伊丹東慶が昭和十四年に亡くなったあとに宇甘西村の村人によって建てられ、その時には、末尾に挙げた写真のように銅像が制作され(写真2)、現在の碑(写真4)の上部に設置されていた。この上部の銅像部分は、その後の戦況のなかで供出された。その後、現在のように「頌徳碑」と刻まれた御影石が置かれた。この伊丹東慶像の写真は、坪田理基男氏から提供していただいた坪田讓治の元にあったアルバムの写真で、写真裏面には自筆による「軍服姿の東慶」との書き込みがある。他の写真裏面には「東慶じいさん」とも記され、讓治が東慶に対する親しみを感じつつそれらの写真を大切に保管していたことが想像される。

また、伊丹東慶と政野が二人で映された写真として(写真5)があり、これは診療室内の写真である。この写真も讓治の元にあった

アルバムの写真であり、讓治が東慶と姉政野との医者としての日々の暮らしを認識していたまなざしが伝わるものである。

次に、東慶と政野の墓碑には、讓治の文章が、次のように横に刻まれている（墓に関しては、平成二十年の移設以前の調査による）。

【表】

妙法 杏林院東慶事日熏沙弥位

妙法 梅林院沙慶日香大姉位

【横】

伊丹東慶年少父母ヲ失ヒ乏シキ間ニ卒業ヲ修メ鄉村ニ醫師トシテ五十五年ノ生涯ヲ終ル 妻政野三男四女アリ 家ヲ興シ子女ヲ教育シ郷人ノタメ尽クシテ至ラザルナカリキ

昭和十四年七月七日没ス

義弟 坪田讓治記

ここには、短い文章ではあるが、讓治の東慶に対する思いが見出せる。まずは、讓治は東慶が幼少期に父母に先立たれて貧困のうちに熊本医学専門学校に通い卒業までの苦勞をしていることを認識していると考えられる。この讓治の文章には、先に触れたように坪田家も学費と開業に至る支援金を出して支えた東慶が、村人にも出資してもらい、その後村に帰って医者となり、それらのお金を返し終えて天満で誠実に医師としての生涯を送ったことへの感慨深い思いが込められている。

なお、姉政野は九十三歳まで長生きをしているが、この墓は建立の際に夫婦墓として作られ、讓治は政野に対する文章もあわせて寄せたのだといえる。

東慶と政野の子孫

その後の東慶と政野の子孫についても、讓治との関係が続き、讓治は伊丹家への思いを寄せ続けている。

伊丹慶人^{よしと}

東慶の子のうち、長男慶人（昭和二十年一月十四日没 享年三十五歳）は、東京帝国大学医学部に入り医者を目指した。その受験時代から、讓治は叔父として慶人を東京の自宅に下宿させるなど世話をしている。理基男氏によると「在学中に陸軍の委託学生」（一六八頁）になったという慶人は、卒業して陸軍の軍医（中尉）になったということから、戦地に赴くこととなり、台湾で米空軍機爆撃によって若くして戦死した（軍医中佐）。なお、東慶の三男康人は、医者として大田の伊丹家を継いだ。

讓治は、事実を踏まえた小説「姉」において、長男慶人（作中の名は善人）が叔父讓治の最も苦しい時の家計への援助まで考慮しながら執筆を応援していたことを嬉しく思い、その慶人の好意に頼る心境も持ち合わせていたことを回想している。

その慶人の墓は、東慶と同じ墓所に並び、後ろには次のように讓治の言葉が刻まれている。

【正面】

伊丹慶人夫妻之墓

【正面右】

昭和十二年三月東京帝国大学医学部卒業

昭和二十年一月十四日戦死 軍医中佐
護国院慶文日仁居士行年三十五才

【正面左】

昭和五十一年一月十四日歿

慈教院妙文日行大姉

伊丹紆子 行年六十六才

【後】

われら一族の誇りであったこの人は、台湾嘉義飛行場で戦死しました。ここに葬るにあたり重代の家宝を埋める思ひです。

昭和四十年九月九日

坪田讓治

最後の讓治の文章は直筆で記されている。この文章の「われら一族」という表現をとっていることから、讓治が伊丹家一族に対して、慶人は姉政野の子として坪田家の血もひいている代であることから、坪田家と一体化した伊丹家として、思い入れを抱いていたことが窺われる。また、「重代の家宝」という表現にも讓治の慶人に対して、大切な伊丹家の血筋とともに医療の精神を継ぐことにおいて伊丹家代々の宝として認識していることが示されているように。

以上のように、讓治は姉政野の夫東慶とその息子慶人に対して墓碑銘を寄せており、それらの墓でのそれぞれの法事が行われた昭和十四年と昭和四十年に天満を訪れていたと推測される。

墓の移設に際して

これらの伊丹家の墓所は、天満の伊丹家の前を通る県道71号線(建部大井線)に対して反対側の山の斜面にあった。しかし、平成二十

年に移設され、現在ではその地に次のように刻まれた墓標が建てられている。

この地の伊丹家代々の墓は平成二十年十月十九日には清善導により抜魂を済ませ横浜みどりの里に移設した。

天満伊丹家は御津郡建部町大田から分家して御津郡宇甘西村天満で代々、地域医療に尽力してきたが昭和十四年、三代前の東慶の死去を機に閉院

息子慶人は軍医として昭和二十年一月、台湾嘉義飛行場で戦死、現在、孫の仁朗が医療の底辺で苦しむ患者さんの治療にあたっている。

天満の地に幸多からんことを。

平成二十年十月十九日 伊丹仁朗 邦彦

この碑を建立し文章を寄せた伊丹仁朗氏は、東慶の孫で、慶人の長男にあたる。このように伊丹家の医師としての家系を継ぐ伊丹仁朗氏は、ここに記載されたような「医療の底辺で苦しむ患者さんの治療」をめざして伊丹家の精神を実践する活動を、現在も医療の現場で続けている。

伊丹仁朗

伊丹東慶の孫である仁朗氏(昭和十二年二月二十一日生まれ)は、岡山大学医学部を卒業後、最初に岡山大学医学部神経精神科に勤務し、次に倉敷市玉島の柴田病院等の勤務を経るなかで、ガン患者の治療に森田療法を応用した「生きがい療法」を開発した。その実践として昭和六十二年にガン患者七名とともにモンブラン登山に成功

したということ、当時テレビや新聞で大きく報道された出来事も導いた医師である。その後倉敷市新倉敷駅前「すばるクリニック」を開業し、現在も院長を務める現役の医師として、著書『ガン医療のスキマ 30の可能性』（平成十七年十一月 三五館）や『絶対あきらめないガン治療30の可能性』（平成二十三年八月 三五館）を刊行している。

この精神的な研究実践が、先の墓標の言葉にあった「医療の底辺で苦しむ患者さんの治療」を生み出し、またさらに継続する日々の信念ある医療活動につながっていく点には、伊丹家において代々引き継がれてきた医療を必要とする人々に対する使命感の継承が見出せる。

譲治は、小説「姉」において、仁朗氏の父である慶人の戦死を知った人々が集う追悼会の場で、小学校一年生の仁朗（小説では「ヨシアキ」という名で描かれる）が「明るく愉快な子供」である様子を見て「胸を一杯にし」、その仁朗が初めてその場で父の戦死を知って泣く姿を、「見るに忍びない心持で」見ていたことが描かれている（『坪田譲治全集』第六卷 昭和五十三年三月 新潮社 六〇頁）。この小説「姉」を発表した昭和三十三年以降、譲治は、成人した仁朗氏が医療の道に進んでいることについて、天満での法事など感慨深く知る機会があったのではないかと想像される。

伊丹家の土地と家について

ここまで、伊丹家の人を中心に見てきたが、次に土地と家について調査した結果を述べたい。

まず、天満伊丹家は、分家して以来、この御津郡宇甘天満に居を

構えた。その後、四代目の東慶の時代まで、医者の家として建物は診療所、病棟等、充実が図られた（写真6）および「伊丹家図」参照）。東慶の昭和十四年の逝去に際して閉院したのちの伊丹家については、坪田理基男氏の著作によると、遺された政野たち家族は生活に困窮するようになったため、政野は建物を売ることで辛うじて先祖からの土地を保とうとした。そのことを譲治は、小説「姉」で次のように記している。

家をつぎつぎと売って、娘たちをお嫁にやり、そして末の男の子を学校へやりました。診察室、病室、母屋と年ごとに消えて行きました。家と言っても、建ってるままを売るのはありません。土地は先祖から伝わったものだから売ってはならないと、彼女は考えていたようです。（中略）その頃、村の人が言いまして。

「××さんでは、もう何も言われても、まだ井戸が残ってる。」これはどういう感情を含めての言葉か知れませんが、その井戸はなかなか立派で、外からも目につきました。病室用だったので、高い処に、大きなタンクが坐っていて、下にモーターがついていました。モーターは売ったのですが、タンクを買う人は、そんな山中に一人だっただけありません。それが、ガラんとなった広い敷地に聳え立っていて、道行く人の目につきました。（『坪田譲治全集』第六卷 昭和五十三年三月 新潮社 六一頁）

この文章の初出は雑誌『小説新潮』昭和三十三年九月号に掲載されたものであることから、ここに描写された光景はこの当時にも見られた様子であったといえる。なお、ここで「井戸」と呼んでいるのは、

「給水塔」(写真7)参照)であり、近年まで見られたものだった。

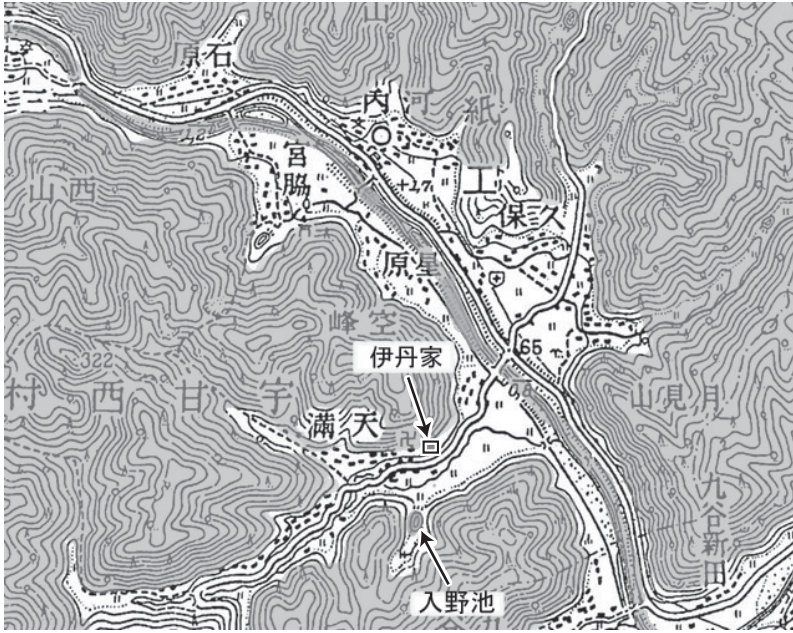
おわりに

以上の調査結果による事実を踏まえて、冒頭に取りあげた伊丹家に関わる一作品の童話と続く二作品の小説という三つの文学作品に対する譲治の思いの経緯について考えると、譲治にとって苦悩の人生のなかで伊丹家の人々と天満との深い交流からの癒しを得たことがかけがえない力となり、伊丹家でのひとこまからの「鯨」で子どもと自然のいのちの漲る世界を童話で描いたことと「お化けの世界」で大人の苦悩の現実世界を小説で描くことを経て、「風の中の子供」でそれらの両世界が融合する意義を見出したといえる。

こうして譲治は、伊丹家から得た力を作品に投入していくこの時期から、大人と子どもの現実世界を、逆境の中でたくましく歩むいのちの世界として描く新たな段階を切り拓くことができたのだといえるのである。

天満周辺古地図

五万分の一地形図「岡山北部」(明治三十年測図大正十四年第二回修正測図 大日本帝国陸地測量部 昭和四年四月三十日発行)



天満伊丹家と坪田家 家系図

天満伊丹家(大田伊丹家から分家)

伊丹善平(一代目)

東庵(二代目)

研吉(三代目)

東慶(四代目)

慶人(五代目)

仁朗(六代目)

坪田家(前新屋)

坪田平太郎

醇一

政野

正男

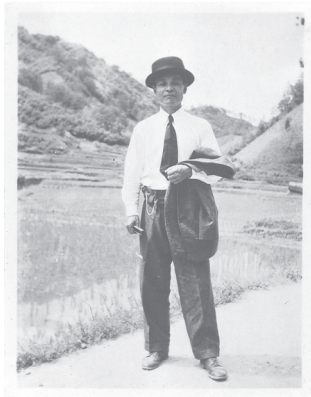
善男

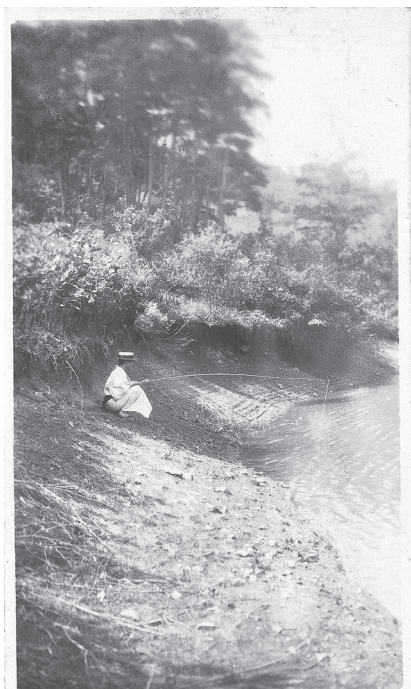
理基男

幸

恭平

〔写真1〕島田製織所社員時代の譲治(天満にて 昭和初期)

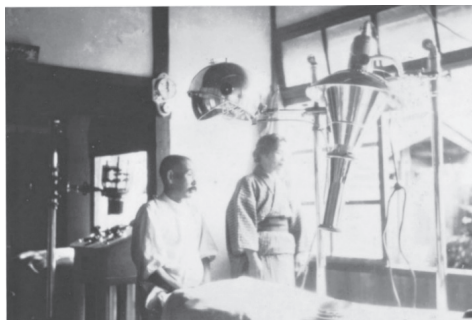




〔写真3〕入野池で釣りをする譲治（昭和七年頃）



〔写真2〕伊丹東慶像



〔写真5〕伊丹東慶と政野（診療室にて）



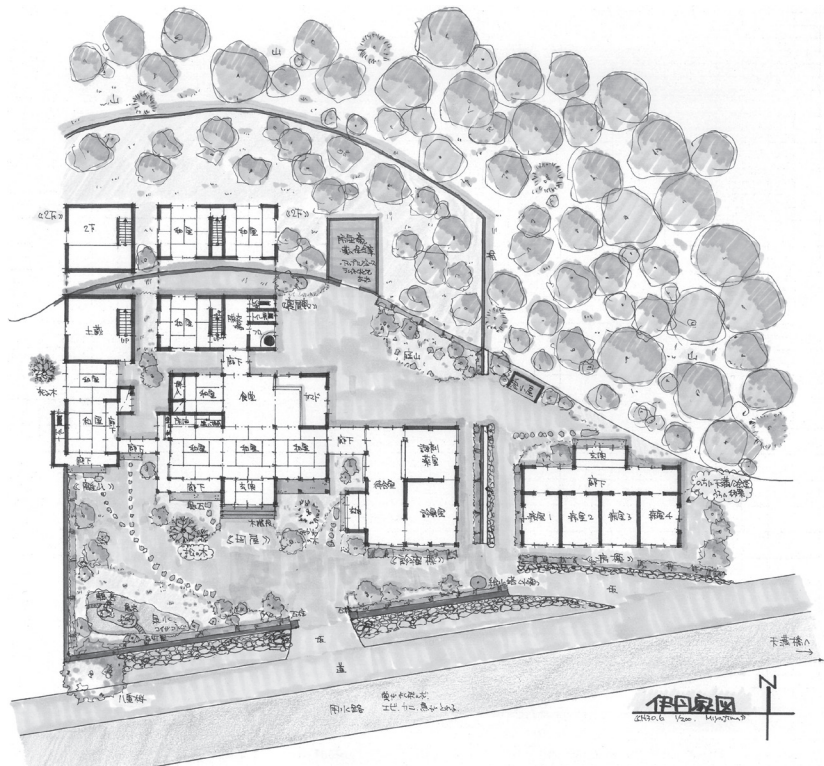
〔写真4〕天満公会堂前の伊丹東慶「頌徳碑」

山根 知子 坪田讓治 作品の舞台

〔写真6〕伊丹家古写真



伊丹家図



〈写真7〉給水塔



※ここに掲載した写真は、坪田譲治の三男である故坪田理基男氏（写真1・2・3・5・6）と伊丹仁朗氏（写真7）から提供いただいたものであることを記して感謝申し上げます。なお、現在の写真（写真4）は筆者による。

※伊丹仁朗氏には、本稿作成にあたり全面的なお力添えをいただいたことを深謝したい。

※鷺峰山常在寺の住職是清圭吾氏ならびに本郷寛武氏には情報提供および調査へのご協力をいただき、宮嶋泰明氏には資料・調査を踏まえた「伊丹家図」の作成と本稿掲載への快諾をいただいたことを感謝をもって記したい。

（やまね ともこ 〓 本学文学部日本語日本文学科）

キーワード 坪田譲治、天満、伊丹東慶

山根 知子 坪田譲治 作品の舞台

